

MONTHLY MAGAZINE KOBEKKO AUGUST 1961 NO. 6

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子



8月号

RKO/50



Hino

コンテッサ
日野ルノ

神戸日野自動車

TEL. 45771-5

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です







あなたを飾る海の宝石!



北村パール

北村眞珠株式會社

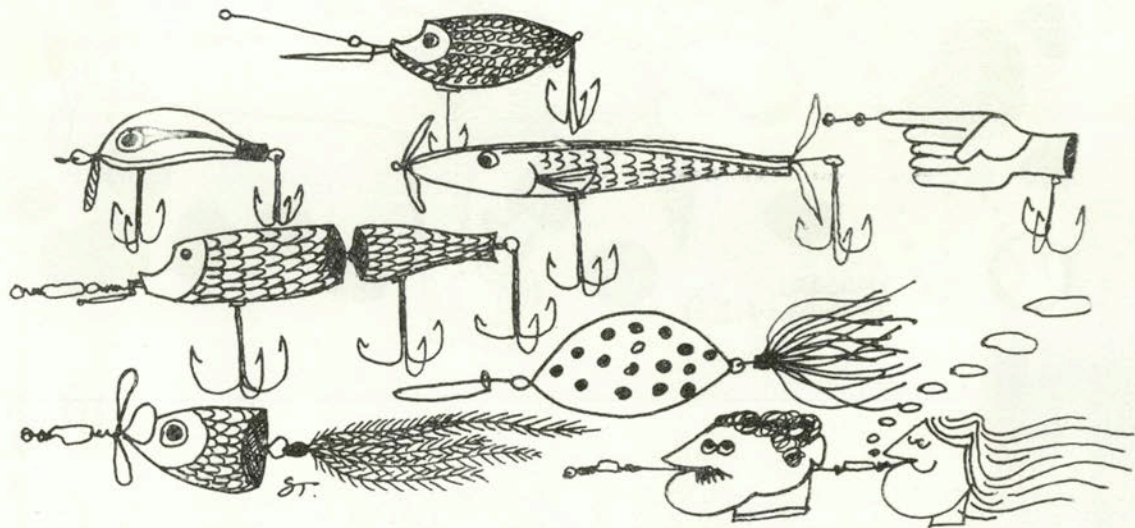
神戸/元町2・東京/スキヤ橋センター
TEL③0072(571)8032



オシャレをたのしむ帽子の店

マキシン

トア・ロード TEL③6711~3



8 月 目 次

PHOTO/神戸の女性・衣川宏	1	23 写真特集/神戸の学園・甲南大学をたずねて
れんさい随筆/甲子園球場三題・阪本勝	4	24 野球っ子対談/長嶋茂雄・本屋敷錦吾
随想/神戸の思い出・金子兜太	9	28 びんくこーなー(T)
神戸を語る・源氏鶏太	10	30 ベアースタイル/福富芳美
随想/白馬の思い出・青木重雄	13	32 KOBEEKKO SHOPPING GUIDE
連載⑤「ここに神戸がある」		38 うまいものシリーズNo.6
トア・ロード散歩・司馬遼太郎	14	神戸のうどん・ソバ・うなぎの店
花時計・レリーフ/松井高男・伊藤誠	18	42 1店紹介・ドンク
BONSOIR MADAME・クラブなぎさ	21	43 連載小説最終回「波止場」・細野耕三
洋酒はなしのタネNo.5	22	47 THE SECOND COVER

表紙/小磯良平・カット/中西勝・写真/米田定蔵・杉尾友士郎・デザイン/橘昭三



れんさい / 随筆 ②

甲子園球場三題

阪本 勝
え 中西 勝

甲子園球場で始球式のタマを投げたのは、これまでに十数回あるが、捕手のミットにタマがともかくはいつたのは三、四回だろうか。

たいていは暴投で、捕手の頭上を一メートルも越して、バック・ネットにあたったり、捕手の二、三メートル横ちょに飛ばして、キャッチしようとする捕手をひっくりかえらせたり、さんざんなっていたらしく続きた。

ところが今春の選抜野球のときは、奇妙キテレツな大失敗をやってしまった。審判員が「それではどうぞ始球をお頼みします」というから、私はそのあとについてマウンドの方に歩いて行った。そしてヘリコプターから落してくれたタマを彼から受けとり、

「投げてよろしか」とたずねると「どうぞ」というものだから、例によって勇ましい？ ワインド・アップをやって、投げようとした瞬間、バッターがいらないことに気がついた。しまった／＼と思って、側にいる審判員に投球を止めようかと聞こうと思ったときには、タマはもう手をはなれていた。タマは三間ばかり先に落ちた。だからあの時は、タマを投げたのではなく、タマが落ちてしまったのだ。満場大爆笑だ。始球式などというものは、失敗する方が観衆をたのしませるものだから、それでいいよなもの、ワインド・アップがはでであっただけ、さすがにあのときは恥かしい思いをした。

バッターがいなくて、捕手だけがいるところへ始球を投

げたのは、いや落したのは、暴投をもって鳴る私にもこれが始めてだ。むかし早稲田総長の大隅さんが、始球式のとき、タマを握った手を振りあげたトタン、タマが体のうしろに落ちてしまった。これでもストライクノだったという話は有名だが、これとならび称せられていい珍始球の光栄を担うこととなったわけだ。

あとでみなが審判員の責任だなどと言っていたが、責任もへちまもない、始球は緊張した議会の始まる直前に、観衆の気分をやわらげる作用のあるものだから、愛嬌のあるタマの方がいいかも知れない。

× × × × × × ×

ラジオやテレビなどで「こちらは大阪甲子園球場でございます」ということがよくある。

兵庫県民のなかにはこれを以前から憤慨しているものが多い。いうまでもなく、甲子園球場は、兵庫県西宮市のどまんなかにある球場だから、当然「兵庫県甲子園球場」とか「兵庫県甲子園球場」とかいわねばならないところだ。そこでいつだったか放送局に抗議したことがあるが、その返答には一理屈があった。

兵庫という文字で見ると分りやすいが、声だけでヒョウゴときくと、ちよつとわかりにくい。外人などは *Hyogo* を *Hyogen* と読むが、その返答には一理屈があった。

水を意味する *Hydro* *Hydro* を始め、*Hy* はハイと読む方が圧倒的に多く、ヒと読むのはごくわずかである。だからやむなく聞きやすいオオサカ甲子園球場といわせていただいているのです。と念のいった説明だったが、飛行場の面積の八割までが兵庫県伊丹市にありながらオオサカ空港といわれてみたり、ともかくヒョウゴという名称で兵庫県はだいぶ損をしている。

先年、渡米したとき、私は自己紹介のとき「神戸県知事」で通した。その方がわかりやすくていいと思ったからだ。神戸市長とどんな関係にあるのかと時々質問されたが神戸市長は私の部下で神戸県のなかの一都市にすぎ



ないと説明してやると、オー・アイ・シーと分ったような顔をしていた。

× × × ×

阪神国道の上甲子園から甲子園西岸にいたる阪神甲子園線がまだ枝川や申川といった清流であったころの思い出や、まだ球場のないころ、あの西側あたりに子供のころ住んでいた森繁久弥がいつかあのあたりをぶらついて「変れば変わるもんやなあ、先輩」と私に語った話などは随筆集に書いたから、ここでは省略するとして、ひとつ球場に対する苦言を申しのべたい。

あの球場内に便所が何箇所あるのか知らないが、主催者側や放送者たちのいる場所に通ずる廊下のあの便所の有様を見てあきれないものはまずないだろう。

あの通路はとくに人通りが多く、いつ行っても大小便ともに満員だ。それに朝顔は五つ六つばかりしかなく、大便にいたってはただ二つだけ。しかも戸はつぶれて内部から鍵はかからず、中は靴の踏み入れようもない不潔きわまる状況だ。

びろうな話だが、私は始球が近づく、妙に大便がしたくなる。ところがいつも二つとも満員か、用便がすぐに誰かが出て来ても、代って中にはいるには、人間たることを一時断念して犬になる決意を要する。

それほどきたくない。出て来ても手洗いの水がない。あるときでも、ちょろちょろ滴が落ちてくる程度。

あれほどの不潔を改良しようとならない球場なら「兵庫甲子園球場」なんて言ってもらわないのが、かえってさいわいだ。

オオサカでいい、オオサカで結構。

これからこう放送したまえ。

「こちらは便所の不潔なことで世界的に有名なオオサカ甲子園球場でございます。」

ヒヨウゴ球場ではありません。」

(兵庫県知事)

秋

秋の風物をいきくとさせる
あなた。
そして
タサキのパール

田崎真珠

直売所・三宮駅前新聞会館秀荷店 TEL(2)5646
 本 社・神戸市葺合区旗塚通り6丁目9 TEL(2)4859
 5626
 養殖場・長崎・熊本・佐賀・鳥根(支店)東京

きものさろん
服飾細貨
東店 西店

おんがら屋

神戸・三宮 西店 TEL③8836
 センター街 東店 TEL③0629

FUGETSUDO

七色の涼味！

メロン

パイナップル

オレンジ

ストロベリー

コーヒー

プリン

フルーツ盛合せ



新発売中冷菓 1ケ ¥ 35.

お土産用箱入 6ケ入 ¥ 240.

15ケ入 ¥ 565.

ゴルフ・マロンガラス



風月堂

神戸元町三丁目 TEL ③ 695・696



金 柴田音吉洋服店

神戸・元町通四丁目 ④ 0693

大阪・高麗橋二丁目 ② 2106

神戸では、最初岡本にいた。

白い乾いた風景のなかに爽竹桃の花が咲いていた。

広い直線の道が海に向っていて、これを歩いてゆくと、毀れかけて黒い中味をみせたビルがたっていたりした。

「独り子と海辺の異形なビルの根に」

という句を作ったのもその頃だ。

白い風景のなかで、塵埃と化したビルの黒さが異常に思えたのだった。

異常といえ、すぐ近くに波多野爽波がいて、彼が主宰している俳誌の座談会と呼ばれたことがあるが、そのとき集った若い人たちの口から、観念という言葉がしきり

神戸の思い出

金子兜太

にでたこともそうだ。この風景のなかで観念という言葉は、やはり黒く異常に思えた。

それから、摩耶山麓に移った。山手というにふさわしい山麓の傾斜は、夜は港の灯を一望のうちに納めさせてくれた。外人の家も多く、昼間散歩していると、金髪の少年が洋風の家で立小便をはずかしそうにしているのを見かけたこともあった。港に近づくにつれて汚れた家が密集して、そのこわれかけた塀はほこりをかぶっていた山手の明るい風景とひどく対照的に思えて、ドストエフスキーの「未成年」のなかで、主人公が塀の穴から自分の陰茎を出して、そこを通る女性が驚くのをよろこ

んでいたところを思い出したりした。

ある新聞に頼まれて、金髪の少年と未成年を対比させた神戸所感を書いたことがあった。この文章は、たしか大阪本社に送られ、強烈すぎる、ということでも没書になったが、いまでも忘れられない。神戸は半分明るく、半分暗い街のように思えてならない。

その頃、俳句を生涯のものにしようとしていた。

永田さんや赤尾さんの恩顧と友情が随分な力になり、知己を得た。ぼくは、神戸にいて俳句にこころをかためたことを非常に好運と思っている。

永田さんの須磨の家では詩人の小林さんたちと座談会をやらせてもらい、橋間石さんを知った。

雨もよいの深沈とした庭は詩を語るにふさわしかったし永田さんの二階の部屋も中世風な憂愁を感じさせ、印象深い。赤尾さんとはときどき飲み、これに板垣鋭太郎も加って、酔った。酔うほどに港町の哀愁を感じた。

これらはすべて、ぼくの俳句の肥料（こやし）になっていた。消防局から出ている「雪」の編集者の好意も忘れたい。神戸はビジネスの街といわれ、人々は表現の世界に遠くいるように思われただけに、俳句を通ずる交情は輝いている。

その頃、務め先の関係でマージャンもおぼえた。クリスマスの夜ガード下の麻雀屋でやっている、外で激しく人の体のぶつかり合う音をきいた。出てみると裸で喧嘩した男の一人が血を流して倒れていた。場所をかえよう、誰からともなくいいだし、家に帰ってまたはじめた夜明け近く、下の道を大勢の男女が聖歌を歌いながら歩いていった。

疲れたぼくらに、その歌は山気とともに清浄にながれてきた。ぼくはそのとき以来浪費を避けようと思いたちますます俳句を愛するようになった。

(俳人)

註 文中の永田さんは俳人、永田耕衣氏、赤尾さんは俳人、赤尾兜子氏、詩人の小林さんは 小林武雄氏

神戸を語る

源氏鶏太

(作家)



(写真は神戸を語る源氏鶏太氏・神戸国際会館ホテルで)

「課長さん」「人事異動」などサラリーマン小説でおなじみの作家、源氏鶏太氏が、このほど神戸にいらっしやったので、さっそくインタビュー。

先生は「神戸を語るほど、詳しくはないんだがな」といわれながらも、好きな店の話、神戸の魅力や、はては小説のことなどを始終にこやかに話してくださいました。神戸にはよくいらっしやるのですか

「僕は、富山ですが、女房が神戸の出でね。それに義弟たちがこちらに住んでる関係もあり、そうですね、年に二回は、女房のお伴で神戸にきてますよ。

泊るのはいつも国際ホテルです。

もともと僕自身は、昭和五年から二十四年頃まで大阪の会社に勤めてたから、仕事の関係で神戸にはよく出てきてましたよ。でもどちらかといえば戦前の神戸の方がくわしいでしょうね。

三宮や元町、そして六甲にもよく行きましたよ」

年二回は神戸にいらっしやっているとすれば、相当の神戸通になられましたでしょうね

「ところがね、大体、僕は大阪に友人が多い関係もあって、国際ホテルに泊まっても、大阪に出る方が多いんですよ。たまに女房の買い物のお伴をする程度だな。でも神戸に来たら必ず行く店が二軒あるんですよ。一つはセンター街にあるとんかつ「むさし」ですが、こんど

などは日参したほどのファンです。

もう一つは元町三丁目の洋品雑貨の店「ヤタナカオ」で目的はネクタイなんです。

僕は、ネクタイだけは神戸で買うことにしてるんですよ。理由はね、銀座当りで買えば、何んだか自分と同じネクタイをしている人に、どこかでバッタリ出会うような気がするんだね、ところが神戸っていうところは、そこにはない品を置いている店が昔からありますね。だからそうした不安っていうのか、心配がないんですよ。それにいい物を置いていますからね。

また、落ついて買える物が出来るファン囲気も好きだな。食事では「むさし」のほか、「ふじはら」のてんぷらや「すし包」などにも時々いきますよ」

これまでに神戸のことをお書きになりましたか
「そうですね。「川は流れる」と「ラッキーさん」に少し神戸の町のことを書いた程度ですね。

「ラッキーさん」は、昭和二十六年頃で、映画にもなりましたが、これには元町の裏筋にある酒場のことを、それも実地見学できず、たしか戦前のイメージのままに書きましたよ。

たしかに神戸の町―ことに六甲山の百万ドルの夜景や港、外人墓地、元町、トア・ロード、北野周辺などは作

家として大いに魅力を感じるんですよ。

ただ僕の場合は、関東に住んでいること、そして忙しすぎてゆっくり神戸を見学できないため、神戸の地理には全く無知なんです。だから神戸のことを書きたくても書けないんですよ。やはりすくなくとも一週間は、小説のための取材をやらねば書けませんからね。

大阪にながくいたこともあって、僕自身は神戸と京都は、ぜひゆっくり取材して、小説にしたいと思ってるんです。そのうちにきつと神戸のことを書きますよ」

先生の作品にはサラリーマンの世界を描かれたものがほとんどですが：

「僕がサラリーマンものを書くのは、やはり僕自身がサラリーマン生活を長年していて、一番よく知っている世界だからでしょうね。つまり、安心して書けるといいます。無難であるということでしょう。

書くときは、いつも「明るく、安心して読める」ということを念頭においてるんですよ。

ファン層は、やはり女性、それも高校生が多いんですよ。他の作家と変ってるのは、小説は読んだことはないが、映画を通じてのファンが多いことですね。

過去十年間に、長編や短編合わせて約五十本が、映画化されましたからね。

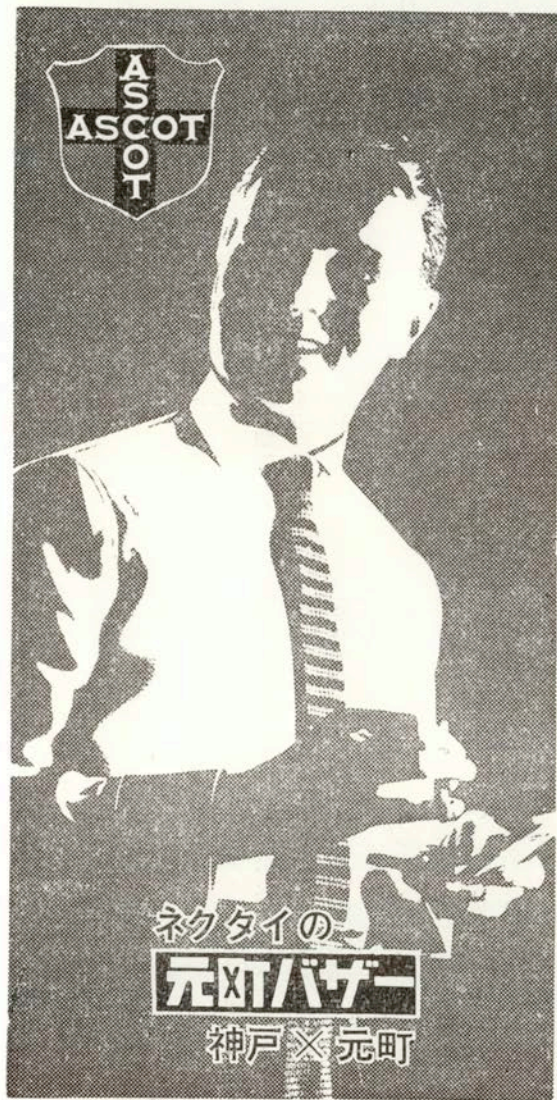
僕としてはあくまでも「小説家」ですからね、映画だけではないと評価されるのは困るんですが……。

だから、これからはひとつ、反逆精神を起して、映画化しにくい作品を書こうと思ってます(笑)

この四月に、東宝の監査役ということになったんですが、月一回、しかも午後二時頃に一度顔を出せばいいんですよ、それに僕はあくまでも「ヒント」を与えるだけのことで、自分が脚本を書くというのではないからね。

いま一カ月の仕事の量は、月刊が二本、新聞が一本、短編物二本、このほかに随筆があるんですよ」

(文責・五十嵐恭子)



舶来婦人服地卸小売
高級婦人服地



マルゼン

神戸市生田区三宮町1丁目(生田筋)
TEL. ③ 0212・5454